

Title	福沢百助著 『果育堂詩稿』(五)
Sub Title	Hyakusuke Fukuzawa's Chinese poems Koikudo-Shiko translated with annotations, V
Author	佐藤, 一郎(Sato, Ichiro)
Publisher	三田史学会
Publication year	1986
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.55, No.2/3 (1986. 1) ,p.131(245)- 140(254)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19860100-0131

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

福沢百助著『杲育堂詩稿』(五)

佐藤一郎 訳注

『福翁自伝』を読む会・諸家補注

(作品56) 春日、訪關子克、分韻得山字。

春日、関子克を訪ね、韻を分ちて山字を得たり。

世上何人脱利關

世上何人か利関を脱し

如君随意解愁(顔)

君の如く随意に愁顔を解かん

看空春日驚花落

看みす春日を空しうして花落に驚き

偶訪書堂羨事間

偶たま書堂を訪ねて事間を羨む

卜築還非嫌負郭

築を卜するに還って負郭を嫌うに非ず

幽清恰若入名山

幽清恰も名山に入れるが若し

誰知高臥無塵境

誰か知らん高臥は塵境に無けれど

不必千峯方嶽間

必ずしも千峯万嶽の間ならざるを

語釈 愁(顔) 顔字欄外より補入。

看空春日 みすみす春の盛りの日々をいたずらに過し

て……

負郭 城郭を背にした繁華の地。

短評 韻字に間が重出する。不用意に使ったものか否か。

福沢一族交遊関係 帆門の同窓の関子克は大坂に居を定め

ており、両者の交遊は密切であった。しかも友人は清閑をたのしむ餘裕すら備えていたのである。

補説 西村天囚(時彦)著『学界の偉人』^上下染江堂書店・

杉本染江堂

明治44年1月再版・上のP148にいう、「中津藩は豊前に

属するも、豊後と関係尤も深し。日出の東岳、梅園の師

敬所、敬所の門人謙卿(雪巖)は愚山と友たり。謙卿の

子白巖、及び山川福沢諸子、皆帆門より出で、福沢百助

の子諭吉あり。亦豈梅園万里の感化なるなからんや。」ま

たP127、帆門(帆足万里門)諸子附伝上に、野本白巖・

関蕉川を、その中に、中村栗園を、その下に、福沢百助を収める。P142にいう、中津に山川玉樵(名義之、字子

方、山川東林の子)、福沢百助(諭吉の父)あり、百助嘗て大阪蔵屋敷の元締と為り、下役の私曲を憤り、監督の責任を負ひて自殺せり。亦氣節の士なりけり」とある。この自殺説は中津でも一部に伝えられているが、富田正文氏により明確に否定された。

西村天囚はP71で三浦梅園・脇愚山・帆足万里の学を要約していう、「愚山は少時西洋学を学ばんと志せしことありしなり、是れ当時の儒生の思も寄らぬ所なり、此の志は梅園に涵養せられし者に非ずして何ぞ、彼れは西学を学ばざりしを悔いて、有用の学、志ある者の学ぶべきを主張せり、其の教を承け其の志を継ぎし者は帆足鵬卿なり、愚山は之を梅園に承けて鵬卿に伝へしなり、諄々たる郷先生の門に、此万里に搏つべき一大鵬を出せしは、淡窓門下三千の呻吟に賢るや遠し、是れ予の愚山を学界の偉人に列する所以なり。」

『学界の偉人』下、に頼春水の大坂の文学の展望がある。

P220『頼春水曰く浪華の人往々文墨を好み、士君子の愧づべき者多し、又曰く、浪華市井の人往々文墨を弄び、其の詩文多く誦読するに足れり、其の他風流好事を以て、世に名ある者も亦少からずと、今の大阪こそ、一文半銭の争ひに日を送れ、以前は国学漢学並に開けて、雄

を海内に争ひしものなり、其の原因は二あり、一は諸侯の蔵屋敷ありて、外交の役人中には弁舌と算盤との才のみならで、随分文雅の士少からず、関西交通の衝なれば、学士大夫の江戸に適き、京師に遊ぶもの、必ず我が大阪を経過し、且蔵屋敷には知人も多くして取付もよければ、書生は先づ以て大阪へと志し、遂には足を止むることゝもなりたり、一には大阪の金持長者ども為すこともなく日を送りもならず、酒色一方の奢に長ずるは、家法に遮られ番頭に睨まれ、然りとて香花茶の湯のみも面白からざるより、高明の資ある者は、学問に趨くを此はよき道楽なりと人も勧め、金にあかして書物も買ひ学者をも扶持せしより、名ある文人も足を大阪に止めて、文学隆盛の原因を為せしなり、分けて文学いと盛なりしは、宝曆明和天明にかけての事なり、当時懷徳書院に中井兄弟〔竹山・履軒〕あり、私塾に篠三島あり、与力には隠岐栞軒(名は秀遠、字は子遠)あり、物産学に木村蒹葭堂……」

(作品57)

安永中、大父祇役於浪華之邸、相拒五十年所、而予亦來焉在邸、九月十二日大父之忌日、偶然有感。
安永中、大父の役に浪華の邸に祇りてより相拒ること五十年所ならんとす。而して予も亦来りて邸に在り。九月

十二日、大父の忌日偶然感あり。

(受命在↓祇役於。今茲相拒↓今茲の二字抹消。)

四十余↓五十年所。亦命來于此↓亦來焉在邸。)

紙錢手自向風燒 紙錢手自ら風に向いて焼き(馨香↓

紙錢)

邈矣神魂何処招

邈なり神魂何処よりか招かん

令徳徧思尊貌肅

令徳徧く思えば尊貌肅たり(聞↓令)

簿書謹見姓名標

簿書謹みて見る姓名の標(披↓簿)

従容承統已三代

従容統を承くること已に三代

辛苦起家非一朝

辛苦家を起すは一朝に非ず(戒↓起)

五十年前王父業

五十年前王父の業(四↓五)

羞將狗尾續金貂

羞ず狗尾もて金貂に続くを

語釈 安永 安永一〇九年(一七七二)一七八〇)徳川家

治の治世。

大父 祖父、百助の祖父は政信、号友米。『中津藩勤書』

によれば、「安永六年八月二十五日丁酉大坂廻米方被

仰付、とある。天明四年九月十二日亡くなる。七年五

月罷歸」候 友米明和八年卯二月「格式小役人御切米

拾一石被仰附」とある。

年所 歳月、所は無意味の助字。

紙錢 中国めかして紙錢と表現しているが、実際には線

香を立てたのであろう。紙錢は紙で錢の連った様子を

模り、死者を祭る際にこれを焼く中国の風習。

手自 富士川英郎「江戸後期の詩人たち」のP55「頼春

風と頼杏坪」の項に、新鋤荒地小園開、弱柳疎楓手自

裁。新たに荒地を鋤きて小園開く。弱柳疎楓手自ら裁

う。とある。しかし富田正文氏の説のように、「手ずか

ら」とも読めよう。

邈矣 富田氏いう、「はるかなり」と一度切って「神魂

何処よりか招かん」という方が「矣」の字を生かせる

ように思います。

簿 稿本では草冠りに作る。富田氏いう、「やはり簿の

略体でせう役所の帳面を調べていたら、偶然おじいさ

んの名前を見付けたのでせう」

辛苦起家非一朝 富田氏いう、友米は奥平家の家臣とし

ての福沢家の始祖ですから、それを讃えたのでせう。

それ以前は旧小笠原家浪人に過ぎなかった。

金貂 貂はテン。「貂不_レ足狗尾続」(『晋書』趙王倫傳)

貂蟬の冠をつける高位に昇るべき徳を備えた人なく、

続くに下賤の者を以てするたとえ。富田氏いう、ツヅ

クではなくて、ツグと訓みたいように思ひます。

(作品58) 九月二十一日、先考忌日看菊有感。

九月二十一日、先考の忌日に菊を看て感有り。

悽然早起踏晨霜

悽然早起して晨霜を踏み

客舎秋高籬菊黄 容舎秋高くして籬菊黄なり
歳々花開人不見 歳歳花開くも人は見ず
對花悲慕舊時香 花に對して悲慕す旧時の香
。「菊」欄外より補入。

語釈 先考亡父。ここでは政房、号は兵左衛門(第二)

寛政十二年御宛行二石増、都合拾三石に成。

悽然 いたましい、悲しい。富田氏いう、「悽然早起」
は私にはピッタリ来ない詩句です。父の命日だから、朝から悲しんでいるのでせうか。よくわかりません。

歳々花開人不見 初唐の劉廷芝「白頭を悲しむ翁に代る」の、「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同」を踏える。

短評 百助は家庭的な人である。单身赴任だけに、(作品57)での祖父や本詩での亡父のことも、いっそう切実に追想されるのであろう。

(作品59) 歳晚有感。

歳晚感あり。

寒燈紙窓下 寒燈紙窓の下
形影可相親 形影相い親しむべし
官舎四檐雨 官舎四檐しやんの雨
關山千里人 關山千里の人

帰郷期末至 帰郷の期末だ至らず
爲客歳将新 客と為りて歳将に新たならず
猶有忘憂物 猶お忘憂の物あり
頽然醉答春 頽然として酔いて春に答えん

語釈 紙窓 障子。

形影相親 李白「月下獨酌」に「花間一壺酒

獨酌無相親、一舉杯邀明月、二對影成三人」とあり。

客舎 中津藩大坂蔵屋敷を指す。

四檐 四方のひさし。冬の雨の音は孤独感を強める。
忘憂物 酒の異様。

答 答の俗字(『宋元以来俗字譜』)

短評 单身赴任の孤独感がよく出ている。「官舎四檐雨、關山千里人」の對句もいい。無限の感慨がこめられている。

(作品60) 十二月立春作。

十二月立春の作。

屈指今年終一句 指を屈おれば今年も終かに一句
市頭喧聒起黄塵 市頭喧けんかく聒して黄塵起る
等間歳暮誰留歳 等間たり歳暮誰か歳を留めん
忙裏春來或覺春 忙裏春來らば或いは春を覺おぼえん
柳要輕風將着眼 柳は輕風を要して將に眼を着おけんと

し

梅衝飛雪既開脣

梅は飛雪を衝きて既に脣を開く

細看造化生く意

細かに看る造化生生の意

日促東君暗欲新

日に東君を促して暗かに新たならんと欲す

と欲す

語釈 喧聒喧騒におなじ。聒はやかましい。

等間 意を用いないこと。

柳眼 柳の新芽。あたかも人の眼に似る。

短評 今年もなすところなく暮れたの感慨しきりである。現在でも堂島川・土佐堀川べり一帯は大阪の美観

地区であり、川には水苔も生じ、大都会を貫流する川

として隅田川より水が澄んでいる。かつて蔵屋敷や文

人たちの家が連なった堂島には、柳も梅も多かったこ

とだろう。市井の喧騒にやゝ距離をおいて、新春への

胎動を観察している。

補説 文政七年三月より大塩中齋と頼山陽の交遊はじま

る。

幸田成友『大塩平八郎』にいう、「山陽が京都から下り、

篠崎小竹を介して中齋を訪うたは、文政七年三月が最初

で、天保三年四月洗心洞に会し、『古本大学刮目』の稿

本を読んでこれに序せんといひ、また『劄記』若干条を

読み、上木の曉必ずこれを批評せんと約したのが最後

で、その秋九月山陽は病死し、中齋は彼が易簣えきさいの日に京

都に上ったが、ついに臨終に間に合わず、大哭して帰

り、往事を追思して、夢のごとく幻のごとく覚えたとい

うは無理ならぬ。」文政七年、中齋は三十二歳である。

同書にいう、「平八郎〔中齋〕は文化十四年に定町廻り

となり、翌十五年すなわち文政元年には目安役并証文役

に、文政九年には、吟味役、極印役に進み、翌十年に

は、盗賊役唐物取調定役を加え、そうして文政十三年す

なわち天保元年には辞職してしまった。」

○文政七年には、中齋三十二、百助三十三、山陽四十五、

小竹四十四歳。

文政乙酉（文政八年、一八二五、百助三十四歳）

（作品61）正月三日郊行

正月三日郊行

南郊試吟杖 南郊試みに吟杖し

緩歩訪東君 緩歩して東君を訪ぬ

歳改僅三日 歳改まりて僅かに三日なるも

春催既十分 春催うながすこと既に十分なり

雪消山染黛 雪消えて山は黛に染り

水解水成紋 水解けて水は紋を成す

目送帰鴻翼 目は送る帰鴻の翼

飄々鼓霄雲 飄々として霄雲を鼓うちぬ

語釈 吟杖 詩を考えながら手にする杖。

霄雲 雲。

短評 最後の二句に、作者自身の投影が窺われる。

補説 『大阪の学問と懷徳堂・適塾』(大阪大学) P 85に

「文政8年 異国船打払令、緒方洪庵、文政8年、16歳、元服、田上驛之助惟彰と名のる。大坂の蔵屋敷留守居役となつた父に従い、10月大坂に至る。」とある。

さらに「文政9年、17歳、7月中天游の門に入る。この時より緒方姓となる」と続けている。

(作品62) 奉送桑名大夫帰郷

桑名大夫の帰郷を奉送す

已祇東都役 已に東都の役に祇りしに(藍輿関東至↓)

已祇東都役)

又爲西海行 又西海の行を為さんとす(暫留浪速城↓)

又為西海行)

容人心自豁

人を容れては心自ら豁くおのずかひろ

接物氣常平

物に接しては氣常に平かなり

飛雪関山暗

飛雪 関山暗く(飛雪山峯↓飛雪関山)

寒風草木鳴

寒風 草木鳴る

知将叱奴意

知りぬ 叱奴の意(志↓意)

兼慰倚門情

兼ねて倚門の情を慰めんとするを

語釈 葉 桑の異体字。

叱奴 奴隸にも比すべき自分を叱りつける。

倚門情 母が子を思うなさけ。倚門望。ここでは、故郷で待ちわびる妻も当然含まれていよう。

短評 最初の説明的な「藍輿関東より至り、暫らく浪速城に留まる」が推敲の結果、感情のこもつた表現に変わっている。

「山峯」より「関東」の方が、「志」より「意」の方が余韻がある。また、結びの二句によって、帰郷の希望を家老まで申し出たが、これが聞き届けられなかった様子が解る。

福沢一族交遊関係

福沢一族交遊関係

桑名大夫 桑名家、中津藩大身、世禄八百石。文政六年

刊の『武鑑』奥平家老職の末尾に「桑名登」とあり。

河北展生氏いう、

桑名家は

勝興明和二年家督 文政元年死 | 勝峯七五郎 伊織 文化元年十一月死

勝全七五郎 惣兵衛 登内記 文化十二年家督

文政元年 若殿様ヨリ御用人同様被成下候

文政六年三月十二日 御家老職被仰付候

同年九月廿四日 御勝手掛被仰付候

同七年七月七日 御勝手御用ニ付出府被仰付候

同年八月七日 学館掛被仰付候

同八年九月四日 御勝手掛御免被仰付候

同十一年四月七日 御勝手惣掛学館掛合被仰付候

同日御用在之出府被仰付候帰路大坂表御調金

御用被仰付候

同十二年四月四日 江戸表御類焼ニ付俄出府被仰

付候

同年六月十一日 少身不勝手之趣被及御聴五ヶ年

中十人扶持被下置候

同十三年正月十九日 有故御役御免被仰付候

天保二年十月七日 去ル子年大坂御調金出精致候趣

ニ而銀七枚被下置候

同四年六月廿八日 縁辺一件ニ付遠慮被仰付候

補説 中津藩の財政事情…藩主昌高は島洋重豪次男、文化

十四年三月溜間格、従四位侍従。この昇格運動によって藩財政は悪化した筈で、蔵役人として有能な百助の帰郷の機会はますます遠ざかったものと思われる。

「文化年間に入るや、藩札通用力はとみに減少し、領主財政の貧困からくる武士層の生活破綻は、商人の銀札獻金および一種の冥加銀である国恩講によって辛うじてきりぬけはしたものの、文化十三年の藩主昌高の溜間格への昇格に際しても、その御礼金にもこと欠き、在中一統

からの抛金なしには不可能であった点をみればよい。しかも支配階級内部の均整が崩れはじめると、富商層にたいする藩債の強制取立力も弱まり、これまでみられた商業資本に対する支配は妥協へと大巾な転換を余儀なくされてくる。その意味では、当藩における商業資本との妥協の時期は化政期であるということができよう。」

篠藤光行「中津藩の藩制改革」にいう(宮本又次編『藩社会の研究』ミネルヴァ書房)

(作品63) 一泣、一泣

山頭忽見白雲飛

願望郷関涙湿衣

遙憶倚門風雪裏

年闌只待咸西帰

山頭忽ちに見る白雲の飛ぶを

郷関を願望すれば涙衣を湿す

遙に憶う倚門風雪の裏

年闌にして只だ咸の西帰するを待つ

らん

〔原注〕…來詩云衣錦帰又遙憶之二字來詩佐應憶。來詩に云う「錦を衣て帰る」。又「遙に憶う」の二字あり。來詩、憶いに応うるを佐く。

語釈 倚門 家の門によりかかって子の帰りを待ちわびる。

飛・衣・帰は韻字上平声「之第七」「広韻」

短評 友人からの詩に望郷の念しきりである。親の立場に托して自分の帰郷を待ちわびているだろうと述べて

いるが、これは詩としてごく普通の発想である。

(作品64) 一顰 一顰

五更飛雪隔窓穿 五更の飛雪窓を隔てて穿つ

郷夢醒來不作眠 郷夢醒め來りて眠りを作さず

憐殺繡閨燈影裏 憐殺す繡閨燈影の裏

孤衾如水已三年 孤衾水の如く已に三年

〔原注〕 右二首野君美以後聯二句見贈依續成以呈右の

二首、野君美より、後聯を以て二句贈らる。依つて続

成し以て呈す。

語釈

憐殺 あわれむ。殺は強調の語感。

繡閨 美しいぬいとりをした女部屋

野君美 野本君美。

短評 故郷の妻も可哀そうに孤閨を守って、すでに三

年。川の水のように若い時は二度と戻るものではない

のに。

(作品65) 夏日雜詠 夏日雜詠

樽前把盞洗愁腸 樽前盞を把りて愁腸を洗う

客舎無人夏日長 客舎人無く夏日長し

蜂母知吾窓外静 蜂母は知りぬ吾が窓外の静

軒端來往苦爲房 軒端に來往して苦りに房を爲る

過雨籬邊生晚風 過雨の籬辺に晚風生じ

追涼移榻小庭中 涼を追いて榻を移す小庭の中

牽牛花死新抽蕾 牽牛花死て新たに蕾を抽し

試數明朝開幾紅 試みに數う明朝幾紅か開くを

語釈 蜂母 雌蜂 生物学的事実では一匹の女王蜂に數

匹の雄蜂、多數の働き蜂である。來往しているの

は働き蜂である。

牽牛花 朝顔の異様。

短評 蔵屋敷内の長屋の自宅で、孤愁を払おうと酒盃を

手にするが、夏日はいたずらに長い。雌蜂もわが家に

人氣がないのを知っているのであろう。しきりに軒端

に往來して巢作りをしているではないか。蜂母に孤獨

の身の上の感情移入が見られる。日常のささやかな動

きを、よくその詩魂は捉えている。

補説 『全集』第二十一卷によれば、文政七年元々方小

頭小吟味兼帯、同八年三ヶ年詰被仰付ている。「家内

召連出坂」は同九年のこと、この作も单身赴任のわ

びしさをかこっている。

(作品66) 奉送丸岡仲堅帰郷

丸岡仲堅の帰郷を奉送す

別酒江頭羈客情 別酒江頭羈客の情

慇懃共酌日西傾 慇懃共に酌めば日西に傾く

長天風起鷓鴣搏

長天風起りて鷓鴣搏ち

孤嶋潮來鷗□鳴

孤嶋潮來りて鷗□鳴く

舞子奔濤驅溽暑

舞子の奔濤は溽暑を驅り

須磨朗月洗餘醒

須磨の朗月は餘醒を洗う

忽々今夕分襟去

忽々として今夕襟を分ちて去らば

郷夢隨君到扇城

郷夢君に隨いて扇城に到らん

語釈 孤嶋潮來鷗鳴

七言律詩の第四句は稿では六字き

り載っていない。原詩の□は、仮に注釈者が入れたものである。鷓鴣と相呼応する、「鷓鴣」とか「鷓鴣な

どの熟語が予想されるが、「二六対」の原則により、

後者になる。筆写の際の脱字と思われる。(作品73)

の「舟泊赤石」(舟、赤石に泊る)では「鷓鴣」を用い

ている。

福沢一族交遊関係

河北展生「福沢百助の大坂在番と中津藩士」(「福沢論

吉年鑑」7)

嘉永三年書上げの「藩士家系」がある。……

(一)大坂在番者

丸岡実秀(吉之助・彦太郎・彦四郎・新五左衛門・

新五右衛門文政二年七月二二日 大坂御留主居兼帯

下命八月上坂

七(年)九(月) 江戸表御用ニ付出府下命

八(年)四(月)一三日 御在所御用御坐候ニ付帰国

下命六月帰国

右によりこの送別の詩は、文政八年六月の作であることが確定する。

(作品67) 夢帰故山

夢に故山に帰る

西窓剪燭語分明

西窓に燭を剪りて分明に語る

共慰巴山夜雨情

共に慰む巴山夜雨の情

旅夢忽醒回首處

旅夢忽に醒めて首を回すの處

滂沱一霎四檐聲

滂沱として一霎四檐の聲

語釈 巴山 巴峽にある巫山を意味しよう。男女の交情

に「巫山之夢」の故事あり。

處 處の異体字。百助草稿では雨冠に見える

が、處であると高橋正彦氏いう。

短評 この望郷詩は、ただちに妻への情愛に結びつこ

う。

(作品68) 澄譽上人帰郷相予云歸期在近喜而賦。澄譽上人

帰郷せんとし、予を相して歸期近きに在りと云う。喜

びて賦す。

神通眼力相瓜期

神通の眼力もて瓜期を相す

不恨今霄賦別離

恨みず今霄別離を賦するを

預計丹楓黄菊節

預め丹楓黄菊の節を計りて

相迎重醉舊東籬 相迎えて重ねて旧東籬に酔わん
語釈 瓜期 任期の満ること。王世貞「歸不待瓜期」

福沢一族交遊関係 詩の内容からすれば澄譽上人は同郷の
僧侶。紅葉と菊の頃に故郷の家での再会を期している。

補正・増注

○富田正文氏いう。(作品45) 転句は、「何如ぞ宮線に長
きを添うるの日は」と訓みたいように思ひますが如何
ですか。

冬至は日の最も短い日なので、宮中でその日から以
後毎日紅い糸を一本ずつ増して日影をはかることを行
ったという、それが「宮線に長きを添うる」というこ
とでしよう。

○(作品48) 第三・第四句「共に是れ塵中の客なれば、
同に酒裏の仙と爲らん」とよみたいように思います。
第六句「坐りて」は「そぞろに」か。

○(作品43) の題「即時」は「即事」の誤植。

○(作品55) の第六句の訓「残る」は「くづる」と振り
仮名をつけて下さい。「のこる」と読まれる虞あり。

○(作品53) の吉田生というのは果して中津藩士かどう
かわからないと思ひますが、赤松翠陰著「扇城遺聞」
によると、P252供小姓、初十三石三人扶持吉田代右衛
門。P255小役人、初十三石二人扶持吉田竹次郎、吉田

甚吉という名が見えます。黒屋直房著「中津藩史」P
571には、吉岡流柔術師範系図に、吉田耕作の名が出て
います。竹次郎か甚吉かどちらかが耕作の後と思われ
ますが、百助との交際の手がかりはつかめません。

(昭和六十年四月二十三日)

(作品2) 春愁

はるのうれひ

蘭閨学繡坐春深

春たけなはに垂れ籠むる

不下向他人説中苦心

胸の愁ひを誰か知る

翡翠簾前月光白

独り寝覚めの夜のくだち

一聲横笛夜沈々

冴ゆるは月と笛の音と

(作品3) 秋興

あきのおもひ

蕭瑟三秋晚

秋の晚いと物さびし

金風至自西

そよぐ風 西よりわたる

天高山月小

山の端に月かげほそく

野曠塞鴻迷

野は曠く鳥さへ迷ふ

疎懶任人潤

世を捨てて独り住む身に

間愁待酒携

酒提げて訪ふ人もがも

鷓鴣何所托

逸れ鳥 宿はと問はば

幸有 一枝栖

一枝の栖にて足る

(富田正文氏訳)